

『教育フロンティア』一九六四年三月（全国プログラム学習研究連盟編／教育出版）

《プログラム学習の原理研究 3》

考える態度の訓練について

矢口 新



具体的に思考の訓練がなされ、本当に思考する世界に人間を入れることについて、前号までは「思考の訓練」（一号）、「わかることと思考の訓練」（二号）など、慎重に、また科学的に論究してゆく視野を広めてきた。

今回は、この視野のうち、大脳のならいおぼえたものが転移していく過程を中心に、態度、考え、解放を通して、「ある考え方を会得する」状態を解釈してみた。

■ 理解という二つと、態度という二つと

態度という言葉は、理解という言葉と対のようになって使われている。指導要領などに、理解、態度、技能というように出てくるのが普通である。この場合に、理解と態度とはちがったものであるという先入観があるのかどうかかわからないが、たとえば社会科の目標を、社会に対する正しい理解をもたせ、また社会を科学的に見る態度をやしなうというような表現にぶつかると、理解させることと態度をもたせることとはちがったことであって、ここには二つの目標があるのだなというように考える。

ところで、前号で考えたように、わからせるということは、考えることができるようにすることだとすると、態度をもたせるということとどちらがうのだろうか。一体、態度と理解とを目標としてはわけているが、そういうものを人間の中につくる方法としては、どういう區別があるのであろうか。

これまでの教育の方法では、どうも、そういう区別がはっきりしないのではないか。しかし全くはつきりしないのではないようである。すこし例をあげて考えてみよう。先生に対する態度がわるいなどというときは、それは明らかに、具体的に身体的表現をともなった行動の形について言っている。そういうとき、正しい態度をとらせるように教育するというのは、実際にある正しい態度というものをとらせるのである。今の態度がわるければ、それを修正してよい方に切りかえさせるのである。いわば誤った行動の仕方を訂正するのである。一度やってみてある形ができると、それを何度もやらせてみて、そうだ、そういうようにこれから行動するのだというようにいう。それで態度の教育は一つ終わるわけである。

しかしそういう教育を受けた生徒がこの次また先生にあったとき、その前に習ったとおりの行動ができるかどうか。できないときは、ま

だ態度が形成されていないなどという。あるいは他の先生にあったとき、その先生があまり態度についてやかましくいわないような先生だと、生徒の方もつい油断して誤った行動をする。それはまだ態度ができていないのだという。どの先生にあって、どのような場合でも同じようにふるまう。たとえばおじぎの仕方なら仕方については、いつもきちんとした行動をするとき、その生徒は態度がそなわった、態度ができたなどという。

こういう態度の教育は、一度教えておぼえておけなどというやり方ではなく、なんども場に臨んで、機にに応じてくりかえしやらせて、やがてとくに注意しないでも、すらすらと自然に振るまうことができるようになる。これは結局、実際にやってみる、すなわちドゥーイングの積み重ねなのである。つまり態度というのも、大脳細胞の行動の積み重ねであって、それによって、大脳細胞が一定の行動の仕方のくせをもつことである。ある場に臨んで、それに対する反応の仕方を習慣的にもっていることである。その場面は、具体的には、一応ちがうのだけれども、類型的にみれば共通のものがある。つまり個人としてはちがうけれども、ともに先生であるという点で共通である。誰先生であつても、先生に対する態度として一定の行動の仕方をするのである。大脳細胞の行動の仕方に一つの型ができる。

■ 科学的態度といふこと

これまで考えてきたことは、表にあらわれる態度であつた。あるいは比較的、目につきやすい態度を問題にしてきたが、科学的に思考する態度などというように使われる態度がある。科学的態度とか、正しくものをみる態度だとかいうのになると、そう簡単に目につらない。具体的にどういふ態度かといわれても、やってみせるわけにいかない。先生に対する態度などというようにいかなのである。しかしそうい

うものがないのかというわけではないわけではないようである。科学的態度というのは、科学的に物を考えるという習慣ができていくということであろう。物を考える考え方に、科学的なものと、科学的でないのと区別できるとすれば、科学的に考えるそれが習慣になっているということとは当然考えられてよい。

しかし科学的に考えるというのは、こういうようにするのだというようにたつた一つであるのではない。先生に対するおじぎの仕方はこうだというようには言えない。先生に対するおじぎだって、実はたつた一つの仕方があるわけではない。時と場合に応じていろいろである。さらにもっと一般的に先生に対する態度というような言い方をすると、それは実にいろいろな場面におけるいろいろな行動の仕方を含んでいる。言葉遣いもあれば、心遣いもあるわけである。

科学的態度といふのはちやうど先生に対する態度という一般的な一般のいい方で、もっと幅の広い言いまわしのようである。だからその中味は実に複雑だと言つてよい。だからもちろん、科学的態度をもつのが大切だなどというようなことを言ったからとて、それができるものではない。やはり、大脳細胞の行動の仕方が一定の習慣をもつことであろう。そのためには、大脳細胞が、ある対象に対して科学的といわれるような思考の仕方を、くりかえして、それを身につけることである。しかも科学的といわれることは一様でないから、さまざまな対象に対するさまざまな行動の仕方を身につけなければならないであらう。

それらのさまざまな行動の仕方に全く共通性がないわけではないが、といつて、共通な点だけで行動の仕方を身につけることはできない。やはり具体的なものを一つ一つ積みあげるのであろう。

■ 自由に考えさせると「いい」と

態度のことをことさらにとりあげて述べたことには理由がある。われわれが、子供に自由に考えさせる必要があるとか、創造的思考をさせる必要があるとか、能動的に考えさせる、自発的に考えさせるなどというとき、また反対に押しつけてはいけなとか、受け身の態度で考えさせてはいけななどというとき、根本的には、どうも、態度と関係があるように思われるからである。

まず、自由に考えさせるということについて考えてみよう。これが具体的に何をいうのかはともかく、このことは教育の方法として言われているのだと思う。授業の場における子供の行動の仕方についているのである。そしてそれは何のために言われるのであろうか。子供に自由に考えさせる必要があるのはどうしてか。つまり目的は何かといえ、子供が自由に考えることができるようにしてやるためであろう。自由に考える態度をつくってやるためではないだろうか。ここに態度の問題が出てくるのである。

授業の時に、何かある問題について、結論を出すこと、よい結論が出ることを目的とするなら、恐らく教師が結論を出すのが早いであろうし、相対的ではあるが、より正しい結論が出るであろう。いろいろな子供にいろいろな考えをさせて、それを一つ一つとりあげて、是非を論じていたら時間がかかるし、またよい結論に到達しないかも知れない。よい結論を出すためには、多少とも教師が無理をしなくてはならぬことが大いにある。しかしあえて教師が結論を出さなくて、子供に考えさせて、いろいろな意見を出させるのは、そういうことをさせることによって、生徒が自分で考えて、結論を出して行く過程をたどらせることによって問題にぶつかったとき自分で考えてゆくという行動をとることができるように教育しようというのである。そういう

ように自由に考えさせておれば、自由に考える態度ができるという考え方である。

自由に考える態度を目標として大切にするのは、明らかにそれと反対である自由に考えない態度をもってはいけなと考えるからである。自由に考えない態度というのは——合言葉の上で自由に考える態度というのに対して、私が言った言葉であるが——実際にどういう態度かという、教師の説明をきいてそれをうのみにするというような態度、自分で考えないで、教師を求めるといような態度である。だからそういう態度で授業にのぞんでいること、つまり教師が説明して生徒に受け身でおらせるといような形の授業が否定されるわけである。

こういうことを考えて行なわれる授業は、実際には、生徒に発言させるという形で行なわれている。考えたことをいわせるといわけである。学校という大勢の生徒と一緒に活動する場面での方法としては、たとえば問答とか、ディスカッションとかということになるわけである。そしてこういう具体的な形が、生徒に自由に考えさせていることだと考えている。しかし果してそれでよいのだろうか。

もう一度整理してみる。自由に考えるといいう態度を養うには、自由に考えるといいうドゥーイングを通じてするといいうのは正しいと考えるてよいであろう。問題は、その自由に考えるといいうドゥーイングはどのようなドゥーイングであるのだろうかということである。今われわれがやっているのがそういうことなのだろうか。そこを考えてみなくては、子供に自由に考える態度をつくっていくことにはならないことになる。次にその点を考えてみよう

■ 考えない授業からの解放

自由に考えるという場合の「自由に」といいうのは、本当は何のこと

をいつているのであろうか。かつてにものを考えて行くということではあるまい。この言葉はそもそもムード的で、その実質は何かということとはあらためて考えてみる必要がある。

たとえば、ある統計グラフを見るとする。これについて、教師が説明する。それを生徒が聞いている。その時教師が生徒にわかるように教師と一緒に考えて行くことができるように説明するとする。この時生徒も考えてはいる。

これはしかし自由に考えているとはいわないであらう。それでは、教師がこれについてどう思うかという問いを出したとする。そうすると今度は、生徒は自分で考えてゆく。この場合は物をみて考えて行くという形である。そういう時は、自由に考えているといういい方をするであらう。

この場合の「自由に」というのは「教師の援助なしで」といいかえでもよさそうである。というのは、考える対象が出されていて、それが生徒に考えることがらをきめている。そういう点で生徒は、対象に制約されているのであって、対象から自由になっているわけでない。つまり、眼の前に統計が出されているのに、そんなことは問題にしないで全く別なことを考える自由はない。自由に考えるというのは、そういうことを意味しているのではない。それでは前にある統計グラフのことについてならば、何を考えてもよいか、というところでもなさそうである。

なるほど時に教師は、このグラフについて思ったことをいいなさいなどという言い方をする。だからといって、思ったことを何でも言えよいか。このグラフは一時間かかって作られたらしいなどという答えをしたら教師の問いには合わない。そんなことは教師は考えてほしくないのである。ある方向にむいて、思考をしてもらいたいのである。君はどう思うかなどという問いを発するとき、この「どう」という言

葉は、何も限定していないから、生徒は自由に考えてよいはずである。けれども実際には、考える方向はきまっているのである。

生徒の方でも、「どう」という言葉で実は何を考えるのかはわかっているのである。それは、ただその言葉だけで考えているのではなく、その場面全体からわかるものがあるのである。それはつまり、その場の構造がつくり出しているのである。だから自由といっても、かつてに考えているのでなく、その置かれている場に反応しているのである。その場で必然的に考えることがきまってきたのである。その場に必然的な考える方向、生徒が自ら発見し、自分の力で考えているとき、われわれはそれを自由に考えているというように表現しているのである。この表現の仕方は、本当はあまり適切な表現ではない。

しかし自由などという言葉を使うのには、ある気持がこもっている。恐らく教師が生徒を束縛していたことからの解放といったものが、雰囲気として底に流れているのであろう。つまり教師が考えて、それを生徒に与えて、生徒がそれを受けとるという形からの解放ということであらう。

■ 考え方は社会のもの

しかしその統計グラフの解釈について、教師が考えたとしても、生徒が考えたとしても、その考えることの中味は大してちがわないのではない。いな、その解釈は教師であらうが、生徒であらうが、おなじでなければならぬはずである。いな、どちらかといえば、生徒は教師に従わねばならぬはずである。それは、教師は社会のもっているものの考え方を、社会の代表として生徒に与えるという点で当然である。一つの統計グラフは、社会のもっている考え方の具体的なあらわれである。社会がある現象を科学的に考える一つの方法として、社会が生み出した考え方が統計的処理の方式であり、一統計グラフといえども、

その方法の具体的なあらわれなのである。そういうものに生徒が接してそこで物を考えることを通じて、考え方を会得するのである。そこで教師は、その社会の考え方を生徒に会得させる役割りを果すものとして、生徒にのぞんでいるのである。だから生徒は教師にしたがって、その考え方を会得するのである。

しかしこのことは、教師が、その統計グラフについて考えたことを、生徒に話して聞かせて、生徒はそれをおぼえるという形でだけ教育が行なわれることを意味しない。いな、むしろ反対である。生徒が自分で、その統計グラフを解釈してみ、正しく解釈できるようにすることである。それが社会のもっているものの考え方を身につけたということである。事実、ある一つの統計グラフの解釈が問題なのではない。生徒が必要なのは、その考え方であって、それを身につけた後に、さまざまな現象をそういう考え方で処理できるようにすることである。生徒は一統計グラフの解釈を知っていることでなく、この考え方を、翌日から彼の周囲のもろもろの事がらを考えるときに適用することなのである。

さて、ある考え方ができるようになるためには、そういう考え方で考えてみるということを通じて、大脳細胞の行動の仕方をつくりあげて行くことだということは前に述べた。そこから考えると、生徒に考えるというドゥーイングをさせることが、考える態度をつくることになる、ということも述べた。そこで、教師から解放して生徒を自由にするとするのは、生徒が考えるというドゥーイングをする場においてとであつて、それを阻んでいるものを取り除くことである。そして正しく社会の考え方を身につけるためには、生徒は教師に従わなくてはならない。考え方をドゥーイングする場では、生徒は教師に従わなければならないのである。

これを教師の側からすれば、生徒を考える場において、考えさせな

くてはならぬ。しかしその考え方は正しく指導しなくてはならぬということである。

■ 新しいものにぶつかって考える

さてわれわれは、今や、過去のさまざまな考え方にふれて、新しい考え方も考え出すことができるような頭脳の訓練の方法をどうするかを考える段階にきているのである。

それについては、応用ということを考えてみるのが一つのヒントになるようである。「ある考え方を会得する」というような言い方をするが、それは実際にどういう過程をへて、そういう状態になるのだろうか。たとえば、前から何度も出てきている統計グラフを解釈したとする。そこには一つの考え方があろう。解釈の方法がある。それを使って解釈が成立しているであろうが、それ一つを解釈しただけでは、その生徒は、考え方をはつきり会得しているかどうかかわらないと思うこともある。もう一つか二つの別な統計グラフを出して、しかもそれは同じ方法で解釈できるというような場合、それを解釈したら、その場合、その生徒は確かに考え方を身につけているというようにいうであろう（もっともこの場合、すらすらとできるというように、行動についての時間的な要素も大切である）。この場合、三つの具体的にちがった統計グラフに対して、共通な一つの考え方というものを考えている。考え方というものは実際はその考える対象と離れたものではないけれども、この場合、抽出して考えているのである。ちがった対象に対しても、同じように働く、行動の仕方なのである。われわれの行動の仕方が実際にそうすることができることは確かである。

教育では、これを利用して一つのことを教えて、それをどこにでも応用するというように考えるのである。しかし応用するには、応用す

るような練習をさせるのが普通である。ある考え方を会得させる。それだけでは、その考え方が、考え方として独立しないのである。たとえば一つの統計グラフを解釈してみる。次にそれとおなじようなものを出してやってみる。何度もそれをやると考え方がわかる。ただ一回だけでは、具体的な統計グラフについての解釈ができたというだけで、どういう考え方であったかが分離できないのである。つまり応用練習をすることによって、考え方を分離させるのである。そうすると大脳の行動の仕方が定着してくる。いわゆる「くりかえす」ということは、実はこういうことなのである。機械的くりかえしではない。

ある一つの考え方が身につくと、全くおなじものでなくとも、それを適用することができることは、人のよく知っている所である。おなじ類型に属することについては、同じ考え方をあてはめて考える。行動のパターンを訓練するというようなことがいわれるのは、こういう点に目をつけているわけである。

新しいことに対して適応することができるということは、まずこういう応用ということによって可能であるだろう。生徒にとって、いかな人間にとって、毎日毎日の経験、ぶつかる問題はすべて新しいことである。過去にあったことが全く同じ姿で二度出てくるということはないのである。だから行動というのは、結局、応用的行動だといってよい。とすると、応用できるように基本的な考え方を身につけておくことは大切なことだといえよう。

この基本的な考え方が何であるかを教師がつかむことが、大切なこととなってくる。

■ 新しい問題を解く態度の訓練

しかし応用といっても、教師はよく知っているように、簡単な応用もあるし、複雑な応用もある。簡単とか複雑とかという言い方で言い

表わしている中味は何であろうか。生徒に応用の問題を与えるとき、最初は全く基本型とおなじものを与える。次第にそれからはなれてむずかしくする。そのむずかしいというのは何であろうか。

それは、多くの教師ならば知っているように、考え方といわれるものが一すじでなく、組み合わせられている場合である。つまり複合した大脳細胞の行動が要求される場合である。とすると、むずかしいといわれる行動の場合には、いくつかの行動の仕方が要素として含まれていることになる。しかしそれも、その組み合わせ方を簡単なものから次第に複雑なものへ、すくない組み合わせから多くの組み合わせへと積み重ねて行くことによって、複雑な行動をもできるようにすることができる。そうしてできるようになってしまおうと、それはもう複雑ではなく一つの行動の仕方として一つの考え方として定着してしまうのである。

われわれの考える場というのは、無限に新しい場としてあらわれてくる。その点で、いつも応用的な考え方を強いられるのである。が一方、われわれの考え方自体はまた無限に進歩して行く。考え方の単純なものが次第に組み合わせあって、複雑なものが一つの考え方として成立して行く。それが更にまた組み合わせあって行くというように。

そこで子供を教育するときに、子供に必要なのは、新しい問題に対して、自由に考える、つまり自分のもっている能力で、応用して考えるという態度が必要になるということである。それまでに身につけたものを、自分で組み合わせ、考えて行くという態度が必要になる。それがなければ、子供は与えられたもの以上に出ることができないことになる。これは一定の考え方を身につける訓練とは別に、その考え方を土台にして、新しいものにぶつかる訓練として行なわれる必要があるのではないか。

(国立教育研究所・教育内容研究室長)